

## ビッグー・トーマス (II)

——リチャード・ライトと人種関係——

安部 大成

まえがき

- 1 ビッグー・トーマスの特徴とその構築過程
- 2 ビッグー・トーマス
  - a. メアリー・ドルトンの死まで …… (途中まで第 26 巻第 1 号)

(a 続き)

午前一時過ぎ、打ち解け合った三人は別れに際してラム酒を空け、ジャンは車を降り、ガールフレンドをドルトン家の運転手に任せ立ち去ることになる。

この日の夕方、メアリーを車の後の席に乗せて出発し、若い女主人の命令で、途中ジャンを拾い、この男の自由意志で、運転席から外され、白人男女二人の間に、否応なしに、挟み込まれて前の席に座り、黒人街のレストランへ道案内をさせられて、そこでアルコールを口にするまでの、ビッグーの心の状態と、ジャンと別れる頃のそれとを比べると、質的な相違が生じている。それにメアリーも気付いて、言う。

「『ねえ、あなたが、はい、とか、いいえ、とか、単調な返事をしなくなってから、もう 3 時間ばかりになるわ。』<sup>1)</sup>

ドルトン家を出たのが午後八時半、午前一時に至るまでの 3 時間だから、

彼が打ち解けた話し方をするようになったのは、午後十時頃からである。

もともとジャンは、黒人の解放を運動方針の一つとする政党のメンバーであり、メアリーはそれに共鳴しているから、二人の黒人に対する態度は開明的である。さらに、メアリーは、どういうわけか一貫してビッグーに打ち解けた態度で接触してくる。ビッグーもそれに気付くが、何かの畏ではないか、と警戒心も働かす。

アーニーズ・キチン・ジャックで席を同じくし、ビールを飲み、チキンを食べ、三人で話し合う。その間、彼は「無人地帯」に身を置いているが、ビールよりもうんと強いラム酒が加わり、三人に、人種の相違なく、アルコールは作用して、酔いが回る。ビッグーの人種面での緊張感がほぐれ始め、間違はなく、その効果が現われる。

「彼は今では、まともに二人の顔が見れる程、酔いが回っていた。メアリーは彼に微笑みかけていた。」<sup>2)</sup>

話しかけられている時に「まともに」メアリーとジャンの「顔が見れる」ということは、ビッグーの側から、主体的に、意志疎通の機能が始動したことを意味する。

これまでの、ビッグーの二人に対して行なった言葉の対応は、その人物との関わりを必要最小限に止めようとする、言わば、隔りの設定を意図した、機械的、操作的なものであった。だから、相手の接近は、厄介であり、災いであり、不快であって、酷く緊張させるものに過ぎなかった。

黒人の接近を暴力的に排除する白人、その接近が災いのもとであった白人、互いに共有する人間的なものを共に体験したことのなかった白人と、人間として根源的な共感であるところの、肉体的、生理的共感を共に体験した時、ビッグーがこれまで操作し、設けてきた隔りが、不要のものになり、彼等に対処する時に生じる、防御的な緊張感が消えていた。だから、彼等と共

に車に乗り込み、運転席についた時、

「彼は気持ち良かった。」<sup>3)</sup>

彼のメアリーとジャンに対する関係は、社会的には運転手であり、個人的には友人であった。彼は「無人地帯」から、いつの間にか出ている。

メアリーは運転席の隣に、ビッグーにくっついて座り、ビッグーは難無く車を運転して、メアリーを無事に帰宅させる。

上流階級が住む白人居住地は昼間でも人影は希だが、帰宅したドルトン家は深夜に包まれていて、人気はない。

メアリーは酔って運転席の横に倒れ込み、脚を乱暴に投げ出した格好になっている。求められて、足腰のぐらつく、彼女の体を支えて、ビッグーは二階の彼女の部屋まで、指示を受けつつ、誘導する形で連れて行き、結局は寝室に入り込むことになる。

ビッグーは、この間、a), b), c)三つのことを感じ取って行動している。

a)は、彼女の側に、最初から反黒人的意欲のないことが、大きな促進力となるが、飲酒による解放感と失態の共有、体の触れ合いによる親近感によって、ビッグー側で、意志疎通の壁となっていた人種意識がその通路の脇へ押し退けられるから、メアリーが働きかければ、彼も社会的、人間的に、これに対応することになり、人と人との関係が成り立つ。白人との人間関係はビッグーにとっては、全く新しい体験である。今日まで、20年に及ぶ白人との人種関係の歴史と体験に比べると、まさに短時間の関係である。だから当然のこと、そこには戸惑いが見られる。

しかし、ビッグーの歴史は、白人と人間関係を持つことを切望し続け、それを拒絶され続けてきた歴史、つまり、白人側からの拒絶とビッグー側から

の切望の歴史でもあった。だから、人間関係はビッグーの側から、性急に、貪欲に深められることになる。

ビッグーは、求められて、メアリーを手助けすることになるが、彼女をやさしく、愛らしく、魅力あふれるものと感じ、その信頼に応えたい気持ちになっている。

『「ビッグー、手をかしてよ。体が席にはまり込んで動けないわ。」

彼女を助け起こしてやったが、彼女が車の外へ出て、地面を踏んだ時、両手に彼女の体のやわらかさを感じた。

……彼女の髪が彼の顔にかかって、その香りが彼をつつんだ。彼は微かな眩暈を感じて、歯をかみしめた。』<sup>4)</sup>

「彼女は一人で部屋には戻れないとすると、ドルトン氏かベギーを呼ぶべきではあるまいか？ いや、それはすべきじゃない。彼女を裏切ることになる。」<sup>5)</sup>

b)は、黒人の自分が白人の女を抱きかかえるようにして立っているのを、「白人の男」に目撃されることの恐怖である。この「白人の男」はビッグーを「はねつけた」「白人社会」の力、白人に対等であろうとする黒人に制裁を加え、黒人を白人の下位に置くべく作動している白人社会の力、黒人たるビッグーを暴力的に拒絶する力の象徴である。メアリーとの間の距離が心身共に近くなる時、白人社会の目を感じ、恐ろしくなる。

メアリーは一人で自室に行けると、階段を上りだして何かにつまずき、大きな音を立てる。人が目を覚ましたら、どうなることか。

「ビッグーはそこへ向かおうとしたが、恐怖で体が硬直し、両手を差し出したまま、動かなかった。」<sup>6)</sup>

c)は a)と憎悪とが入り混じった状態である。

メアリーはビッグーが黒人であることで、一度も彼を拒絶したことはない。ジャンも同様である。人間として受け入れ、また被抑圧民解放の観点から、黒人としても受け入れた。

しかし、ビッグーにとっては、彼等との人間関係は、ただ二人の白人との間に生じた、僅か半日の体験である。これまでの人種関係の重みをはねのけるには、明らかに不十分である。

この不十分なビッグーとの人間関係のもとに、圧迫されたことのない、ゆとりのある側から、彼等が解放の視点に立っているとは言え、黒人問題に、圧迫されて貧しい黒人の生活に、介入されるのは彼にとって、苦痛であり、屈辱である。彼等は人間関係が不十分だからこそ、この苦痛も屈辱をも知ることができない。

メアリーに対応している時、人間的に彼女の美しさと偏見のなさに感嘆するが、その身体特徴から、人種が介在せざるを得ず、人種的にメアリーに憎しみを感じる。

元来、このビッグーの人種的憎悪は横造的に二重になっている。憎悪の対象は黒人を憎悪し拒絶するところの白人と、白人に憎悪され拒絶されるところの黒人である。白人憎悪は顕在し、黒人憎悪は潜在している。

しかし、メアリーに人間的に対応している間には後者は顕在化しない。

「彼は無力感と感嘆と憎悪の情が混じり合った気持ちで、彼女を見つめていた。……彼女は綺麗で、ほっそりしていて、他の白人が彼に対して抱くような憎しみをもって、彼を憎むようなところがなかった。しかし、そう

ではあっても、彼女も白人であり、だから憎かった。』<sup>7)</sup>

ここで、メアリーに対応する時にビッグーの内部に生じる、これらの三種の情感を、彼特有の心的状況、「無人地帯」を基に考えてみよう。

彼が「無人地帯」から白人世界の方へ引かれる状態を、「白人の側から働く、人間としての行為に対して、彼の側も人間としての反応をもって行為し、相互に人間関係が形成されようとする状態」、無人地帯へ戻る状態を、「白人の側から働く、人間としてでなく、あるいは人間としてよりもむしろ、白人種としての行為に対して、彼の側も人間としてでなく、あるいは人間としてよりもむしろ、黒人種としての反応をもって行為し、相互に人種関係が形成されようとする状態」と拙稿(I)で定義した。

a)は「無人地帯」から白人世界の方へ出ようとする状態、と考えられる。

出ようとする状態と出た状態とは勿論、同一ではない。出た状態とは、人間関係が成立した状態、すなわちビッグーと一個人の白人との間に、人間的に相互関係が成り立った状態を言う。従って、出ようとする状態とは、人間関係が成り立たんとする状態、ということになる。

一個人としての白人メアリーとビッグーとの間に、人間的に相互関係が成り立たんとしたが、成り立つまでに至らないのは、彼女がアルコールの影響を強く受け、主体的、自律的に反応できなくなってしまったからである。ビッグーはメアリーの言動に対して能動的に反応するが、彼女は彼が反応する程には、また彼が反応するようには、彼に対して反応していない。つまり、二人の間には相互反応ではなく言わばビッグーのメアリーに対する一方的反応が強く見られる。これは二人が屋内に入ってから著しい。

b)は「無人地帯」に戻る状態だが、この場合、メアリーが彼に対して、人種的に対応したわけではない。

『叫んだら放してやれ』(チェスター・ハイムズ作)の白人女性マッジは意のままにならぬ黒人青年ロバート・ジョウンズに憎しみをもち、悲鳴をあげて白人男性に助けを求め、彼をおとし入れたが、メアリーにはビッグーを私的な利益に供しようとする意図はない。マッジ的な女性は危険である。偏見を持つ白人男性の憎悪と敵意を誘発させ、黒人男性に被害を及ぼす恐れがあるから。しかし、メアリーはそのような女性ではない。ビッグーの方でも、その点を見落としてはいない。

従って、「無人地帯」に戻る状態はメアリーとの関係では生じない。

彼が「無人地帯」に戻ったのは、彼が「白人男の目」を感じたからであるが、ここでビッグーには三種類の白人が存在しており、彼はそれに応じて行為している点に注目する必要がある。

人種としての白人：黒人差別と抑圧を行なう人種集団としての白人、抑圧する力の象徴として「男」が前面に出る。

役割としての白人：個別の人として、現実に現われていても、それは人格をそなえた個人ではなく、役割を演ずるところの、組織の構成員であって無人格である。ドルトン家の仕事を紹介したソーシャル・ワーカー、少しは親しくなったが、ドルトン夫妻とペギー、やがて出てくる私立探偵や検事など。

個人としての白人：人間としての一個人。今のところ、メアリーただ一人ということになるが、彼女を雇い主の娘と規定すれば、「役割としての白人」となり、これに対応してビッグーは彼女の運転手になる。

c)は「無人地帯」から出ようとする状態で、a)との相違はビッグーが人種関係の現実を自覚している点である。それは「白人男の目」を感じた直後

のことだから。この点から遡及すれば、a)はその現実を、しばし忘れた状態である。だから、しばし忘れ得る状況に置かれるとa)の状態になる。

彼は、「白人男の目」を避けることを第一の目的に、彼女を抱えるようにして邸宅の内部に入ることになるが、そこでは、一方的に「無人地帯」から出ようとしている。

メアリーと共に家の内部に入ってから、彼女の寝室を探し当てるまでの、ビッグーのa), b), c)の状態、つまり彼の「無人地帯」と関わる状態は外部にいた時のそれに比べて、際だった相違が見られる。これは彼とメアリーとに、それぞれ特有の変化が生じた結果である。

また、二人が個室、つまりメアリーの寝室に入ってから、これらの状態は新しい局面を迎える。

先ず、寝室を探り当てるまでを検討しよう。

ビッグーの場合：白人女性に接近する時に感じる「白人男の目」は幻像ではあるが、それはアメリカ社会の人種関係が内面化されたものであるから、戸外では、しかもそれが白人居住地域であれば現実味を帯びる。だがビッグーは家の内部に身を置くことによって、物理的に「白人男の目」から遮断されている。たとえ彼が「目」を感じても、戸外にいる時程の現実味はない。

メアリーの場合：深夜が過ぎて、酩酊状態に疲れと眠気が加わった上、家庭、つまり、私的自由の領域に身を置いたという安堵感で急に緊張がほぐれ、昏睡状態に陥ってしまう。

意識のあるビッグーとそれが朦朧としていて、応答ができない状態にあるメアリーとの間では、人種関係、社会関係、人間関係のいずれにおいても、相互の関係は成り立たない。しかし、ビッグー側からの一方的な関係、反応は成り立つ。



もしメアリーがさほど酔っていなかったら、彼女はビッグーが運転して戻った車から降りて、一人で家に入ったであろう。彼の任務もその日はそれで終わった筈だ。「白人男の目」を感じ、恐怖を覚える状況に直面したのも、任務が持続した結果である。

客観的には、彼は使用人として、彼女を助けて台所の戸口から家の中に入っているが、「白人男の目」を避けることが念頭にある。

しかし、既に述べたように、家の内部に身を置くと、彼は「白人男の目」から遮断される。

家の内部にも「白人男の目」がある、と言えはる。ドルトン氏の目が。またドルトン夫人やペギーの目でも、その背後に氏のそれがある。しかし、ビッグーはそれを感じていない。何故なら、彼は黒人の男としてではなく、この家の使用人として、そこにいるのだから。「主人」の目は感じられても「白人男」の目は感じられない。要するに彼はドルトン家の使用人としての役を演じているのだ。

「彼は大勢の観客を前に、舞台上で演じているかのような気がした。」<sup>8)</sup>

のも、まさにそのせいである。

彼はメアリーの体を抱えて、引きずるようにして台所を抜け、階段を上り、囁くように彼女に問いただしながら、彼女の部屋を探す。彼女は応答しない。彼は昏睡状態にあって反応しないメアリーに、積極的に使用人として働きかけている。彼の側から、一方的に社会関係が保たれている。

この間に、ビッグーは彼女に対して、使用人として行動しながら、同時に一人間として、密かに別の反応をしている。この反応はメアリーを彼女の自室に送り届けて、彼の使用人としての役割が終わった時、表面に現われる。

これに至るビッグーの一連の反応と行為は、後に彼が弁護士マックスの問いに対して述べた回答の信憑性を検討する上で重要である。

マックスは留置場のビッグーに接見し、メアリーのことに关していろいろと質問する。その一つがビッグーの核心を突いたらしく、彼は逆上して反論する。

『君は彼女が好きだったのかい？』

『好きだったかって、言うのですか？』

ビッグーが急に喉からがなりたてるように大声を出したので、マックスは驚いて腰を上げた。ビッグーはサッと立ち上り、目を大きく見開き、両手を顔の前あたりまで上げたまま、ぶるぶる震わせていた。

『だめだ！ 落ち着け！ビッグー！』

『好きだったか、だって！ 俺は憎んでいたんだよ！ 憎んでいたんだ、本当だよ！』彼は大声で叫んだ。

『座るんだ！ビッグー！』

『あの人は死んだけど、今でも憎んでるよ！ 本当に、今、この時も憎んでるよ……』<sup>9)</sup>

彼がこのように激しく興奮して否定するのは何故か、これを念頭に置いておいて、台所に入ってから、メアリーの部屋に入るまでの、ビッグーの、一人間としての、彼女に対する反応を見よう。

先ず、酔いの回ったメアリーを抱えて中に入り、戸口の内側に立ち止まった時の彼の行為：

「彼女の髪と肌の香にうっとりとなって、彼は薄明りの下で彼女の顔を見つめていた。しばらく、そうやって立っていたが、やがて興奮と恐怖にとられて囁くように言った。

『さあ、あなたの部屋へ行かなきゃ。』<sup>10)</sup>

囁いたのは使用人としてであるが、彼女の体の香にうっとりとなり、顔を見つめていたのは、一人間としてである。興奮もメアリーに対して人間的に反応したことによって生じている。

ではこの恐怖は何によって生じたのであろうか。

戸外で意識した「白人男の目」をここでも感じたであろうことは否定できない。何故なら、その「目」はビッグーに内在化されているから。しかし、この「目」に対する恐怖には、ビッグーの置かれた状況によって、その度合いが異なる筈である。言い換えれば、怖さにも状況によって程度の差がある。

さらに、「白人男の目」とその男（いずれも女と置き換えられるが）の「社会的役割の目」を区別する必要がある。

既に述べたが、ドルトン氏の「目」はビッグーが自己を使用人と規定する限り、それは「白人男」の目よりも「雇い主」の目であり、氏は彼をメアリーを大学に送り届ける運転手として、言い換えれば彼女の付人として採用した人である。ビッグーに不始末があれば解雇処分をするであろうが、それは使用人に対する雇用主の行為であって、白人による黒人差別でも抑圧行為でもない。

ビッグーがメアリーを抱えるようにして台所に入ったのは先ず「白人男の目」を避けるためであったから、彼に内在する、「白人男の目」も、物理的にその「目」が届かない場所に身を置くと、現実味はなくなるから、恐怖を呼び起こさない。戸口の内側で彼女に対して行なった行為と反応は、彼が明らかにその目を避け得たことを実感し、身の安全を確保した上で開始した行為と反応である。

だから、彼が恐怖を覚えたのは、先ず彼が彼女にある行為をしたくなったこと、次いで、その行為がもたらす法的、または社会的制裁を想起した結果

であろう。

彼は彼が行なわんと欲する、この行為を避けるために、彼女を囁くように急き立てて、その行為を促すところの、状況としての場、戸口の内側を離れ、台所を通って廊下に入った、と言える。「白人男の目」を避けて、外から台所の中に入ったように。

ビッグーが欲求し、やがて法的、または社会的制裁を想起した行為とはどんなものであろうか。それは彼が彼女に対して示している官能的反応と彼女に対する彼の思いの内容に示される。

「彼は指先に彼女の体の柔らかい曲線を感じ、肉体の昂揚感に包まれて、彼女を見つめたまま、じっと動かなかった。このみだらな小娘が！と彼は思った。」<sup>11)</sup>

メアリーがビッグーを求めたり、誘ったり、唆したり、抱きついたり、体を寄せたりしたわけではない。彼女は昏睡状態にあつて身動きできない。ビッグーはこの行動不可能な状態にある女性に対して、使用人としての行為の外に、一人間として一方的に行為し、そこに一方的な官能的反応を示している。彼女は勿論、何の反応も示さないが、その女性を「みだらな小娘」と規定する。これは、彼の行為と情感を逆説的に表現した言葉である。彼は意識の何処かで、自己の行為と反応を「みだらな」と判断していたと言える。

彼はメアリーにそのような行為を行なうことによって生じる法的、または社会的制裁を想像して恐怖したのだ。この場合の制裁または報復を人種差別、あるいは人種主義に基づく行為と規定することはできない。不正や背徳に対する規制、非難、制裁は正当性を有する。しかし、人種集団の間に対立・抗争があれば、そこに憎悪が加わり、凄惨なものに変貌し、その正当性を逸脱する傾向にある。しかし、不正と背徳を混乱の中に見失ってはなら

ない。

ビッグーが恐怖を覚えたのは、正当性を逸脱した、凄惨な報復を想起したからではなく、彼が法的または社会的制裁を招くような行為をしていることに、つまり自分の行為が不正あるいは背徳に陥る危険性に気付いたためであろう。「このみだらな小娘が！」という言葉は、彼自身を逆説的に表現すると共に、彼自身の行為を非難し、これを突き放し、回避せんとする自己規制の意味をも持つ。彼は使用人としてでなく、また黒人としてでなく、一人間として行為していることを知っている。

ドルトン邸宅の戸外で、彼女が酔っているとは言えまだ意識がはっきりしていて、彼に対して、主体的に対応し得た時、彼は彼女に対して、精神的に対応していた。

屋内で彼は主体的、意識的な対応ができなくなった彼女に、一方的に肉体的に対応している。

さて、ビッグーはもう一つ、これらとは別の反応をしたことがある。メアリーに対して未だ心が開かず、彼は緊張して「無人地帯」に身を置いていた。その状態で、彼がジャンとメアリーとに挟まれて運転席に座った時の反応である。

「彼の両側いずれにも白人が座っていた。彼は気味悪く近づいてくる大きな白い壁の間に座っているのだった。これまでにこんなに近く白人女性のそばにいたことはなかった。彼女の髪の匂いがし、彼女のものの柔らかい圧迫も彼の太ももに感じ取れた。」<sup>12)</sup>

彼は彼女の体が彼に物理的にくっついていることを自覚しているだけで、これに対して、ドルトン宅へ戻ってからのような、精神的な、あるいは肉体的な反応は示さない。彼は緊張して、体を硬直させている。

「非常に狭い空間に閉じ込められているので両腕と両脚が痛かったが、敢えて身動きしなかった。体をもう少し楽にしても、二人はべつに気にも止めまいが、自分が身動きすると自分自身を、また自分の黒い体を意識することになりそうだった。彼はそれが嫌だった。この二人は彼が感じたくないことを感じさせたのだった。彼が白人であれば、つまり彼もこの二人と同じようであったら、話は別であったであろうが。彼は黒人なのだった。」<sup>13)</sup>

彼はメアリーの「髪匂い」「柔らかいものの圧迫」を物質的、物理的なものとして感じ取り、その身近さに拒絶反応を示している。身動きすれば彼女の白人女性としての体ではなく、彼の黒人としての体の方を際だって自覚することになる。そうならないように、身動きしなかった。彼は物理的に二人の白人に挟み込まれて、白人と黒人との双方から、意識の領域においてその中間、つまり「無人地帯」に納まっていた。この場合の彼はメアリーに対して拒絶反応を示していると言える。

さて、ドルトン邸宅の内部でのビッグーの行為に戻ると、彼は彼女が拒絶したり、抗議したり、抵抗したりできない状態にあるのを知っているし、また彼女が欲求したり、言い寄ったり、抱きついたりしていないことも知っている。その中で、彼は彼女に積極的に行為している。

彼女を支えるように抱きかかえて、じっと立っていたのは彼であり、誰に強制されたわけでもない。そこには彼女に対する嫌悪や憎しみなど微塵もない。

屋内にあって、彼女が憎くなる場面がある。彼女を半ば歩かせ、半ば引きずるようにして台所を通り抜け、階段の上り口に達した時である。

「また彼女が憎くなり、彼女をゆさぶった。」

『さあ、目を覚ますんだ！』<sup>14)</sup>

彼が「また憎く」なったのは戸外にいて憎くなったのに次いで、二度目のことを言う。しかし、戸外で感じた憎悪は

「彼女も白人であり、だから憎かった。」<sup>15)</sup>

というもので、それにはそれ相応の状況があった。戸外で彼女の体を支えて立っているところを、白人の男にまたドルトン氏に見られたらどうなるか気になって、彼女を一人行かせると、彼女はつまずいて大きな音をたてるので、人が目を覚ますのではないかと恐怖した。彼は白人の目を恐れていたので、彼をそうさせる白人を憎悪し、メアリーも同じく白人だから憎かったのだ。

屋内で「また憎く」なったのは、あたかも彼女が白人であるから憎んだように取れそうだが、そうではない。

「憎く」なったのは、彼が、「自己規制」のために、その「危険性」のある状況としての場を離れるために、移動する過程で、メアリーが足手まといになった上、今度は彼女を伴って階段を上らなければならない状況に直面したためである。彼女が「白人」だからではなく、彼女が厄介だから憎んだのだ。だから、彼は彼女を目覚めさせて、歩かせようとしたのだ。

ビッガーの「憎悪」の中身は彼が置かれた状況によって異なるから、その状況に即してその中身を的確にとらえ、判断しなければ、彼の本心をとらえることができない。彼、ビッガー・トーマスの白人との関係は作者リチャード・ライトの人種関係における立場と緊密につながっているので、これは重要な作業である、と筆者は考えている。

彼は彼女を抱えて階段を上り、二階の廊下に出る。彼は彼女の部屋に近づくが、万一間違えてドルトン夫妻の部屋のドアを開けたら、と思ったが、その思いに恐怖感は全く見られない。ここでは彼は使用人として自己を規定しているから。

「彼等ができることはせいぜいのところ俺を解雇するだけだ。彼女が酔払ったのは俺の責任じゃない。」<sup>16)</sup>

こう判断できる彼はドルトン夫妻をまさに雇用主として意識しており「白人」としては意識していない。

彼はメアリーの部屋に入り、彼女の体に手をかけているところへドルトン夫人が入って来て、夫人の出現に驚愕し、恐れおののくことになるが、それまでの間に、彼はそれがたとえ肉体的なものであったにせよ、メアリーの魅力に引かれ、強く抱きかかえこそすれ、彼女を嫌ったり、恐れたり、憎んだり、拒絶したことは全くない。

ビッグーはマックス弁護士に、彼女を憎んでいたと回答し、納得いかぬマックスがいろいろと問いただすと、それに見合うような回答なり、説明をする。彼女を憎みだしたのは何時からのことか、と問われて、

「『あの方が話しかけてきた時から、あの人の顔を見た時から、憎んでいましたよ。会おう前から憎んでいたんだと思います。』」<sup>17)</sup>

と答えているが、こういう宿命的な装いをした投げやりの返事は事をごまかすには効果があるが、信憑性に欠ける。

彼がマックスに吐露したメアリーに対する憎しみとその理由を作品の事実



に照合して検討してみることにしよう。

「『あの人はたくさん尋ね事をしたのです。憎くなるような振舞いや話をしてきたのです。私を犬のようにみじめな気持ちにさせたのです。腹が立って泣きたい程でした。……』」<sup>18)</sup>

「『……あの人は黒人の暮らしぶりを話してくれ、と言ったんです。私がいる前の座席に入り込んで来たり……』」<sup>19)</sup>

彼は憎しみの理由または原因を二つの事項に分けて要領良く述べている。問題は憎くなかったところを伏せている点だ。この点は後に取り上げることにして、先ず彼が挙げた二つの事項を検討しよう。

第一事項：憎くなるような振舞いをする

私のいる前の座席に入り込んで来た。

第二事項：憎くなるような話をしてくる

黒人の暮らしぶりを知りたかった。

基本的には第一事項は彼女の身体的接近、第二事項が精神的接近と言えるが、黒人の暮らしぶりを知るべく、黒人の家庭に足を入れれば、身体的接近をも含むことになる。ただ、それが行なわれなかつただけで、可能性としてはあり得るから、接近されることを阻止しようとする側には、第一事項と第二事項が一つの行為として重なるような事態が想定されると、憎悪は強まるだろう。

要するに彼のメアリーに対する憎悪は、彼女が身体的に、あるいは精神的に彼に接近することによって生じることがはっきりする。

彼が彼女の接近を嫌うのは、彼が構築してそこに身を置いているところの

「無人地帯」を侵略されたくないからだ。

この「無人地帯」については前回に述べたが、これは白人社会と黒人社会との中間に位する。

繰り返して言えば、彼の「心を強く引き付け」た上、彼を「はねつけ」たところの白人社会と「彼が置かれている、進歩発展を妨げられた人生生活」の場、即ち、彼が住んでいる「外された社会」であるところの黒人社会との中間にある。

彼がメアリーの属する「白人社会」だけでなく彼自身の属する「黒人社会」をも憎んでいる点を想起しておこう。「社会」にはその構成員が当然のこと含まれている。

「彼は家族の者達が苦勞していることも彼にはそれを助ける力のないことも知っていたので、家族の者が憎かった。みんなの生活ぶりを、その生活の恥辱と惨めさを、そのまますっかり感じ取ったら、その瞬間、彼は恐怖と絶望によって自己を見失ってしまうであろうことに気付いていた。……自分の人生の意味を十分に意識に入り込ませたら、その瞬間、彼は自殺するか誰かを殺すことになろうと感じていた。」<sup>20)</sup>

ビッグーは白人の差別と抑圧によって、貧しい、惨めで恥ずかしい暮らしを強いられた黒人社会の実状を憎んだのであって、黒人社会そのものを憎んだのではないが、貧困と社会とその社会の構成員は一体化するから、彼はいつの間にか黒人社会を、さらには黒人を、またその黒い皮膚そのものをも嫌い、憎むようになってしまっている。

ジャンに握手の手を差し延べられ、彼がまごまごしているうちにその手を握られ、これを引き離そうとするとジャンは一層強く握って笑顔で友情を示し、その手を放そうとはしない。それを見てメアリーは目を輝かせている。

「彼は自分の黒い皮膚を痛切に意識していたし、ジャンやそのような連中が彼にこの黒い皮膚を意識させるようなことをしてきたのだという苦々しい確信があった。白人は黒い皮膚を軽蔑しているのじゃないか？ ……一人は俺の手を握り、もう一人はにこにこして、俺を見てそこに突っ立って、俺にその黒い皮膚を感じさせているのじゃないか。……彼はジャンとメアリーに口も利けない程の、冷ややかな、言うに言われぬ憎しみを感じた。」<sup>21)</sup>

ジャンが運転席のビッグーを横に押しやってハンドルを握り、メアリーがビッグーの脇に座り込んで来て、ビッグーの黒い体は二人の白い体で挟まれてしまう。

ジャンが運転して車は黒人街に入る。ビッグーの横でメアリーは体の向きを変え、

「……彼の腕に片手を置いた。

『あのねえ、ビッグー、私、前からね、ここらの家の中へ入って見たいと思っていたのよ。』と彼女は両側にぼんやりとその姿を見せる暗い、高いアパートの建物を指差して言った。『あなたがた黒人がどんな風に暮らしているのか、ただ見てみたいだけなのよ。……私、黒人の家庭の中に入ったこと、一度もないのよ。……』<sup>22)</sup>

このように言われて、

「心臓が激しく鼓動し、彼は自分の呼吸を整えようと苦闘した。彼は自分を押さえ得ることができなくなりかけていた。」<sup>23)</sup>

メアリーは身体的に接近するどころか、体を接触させ、彼に黒い皮膚を鮮

明に意識させるばかりか、彼が恥辱であり、惨めである故に、意識の中に入れまいとしてきた、彼の家族を含めた黒人家庭の中に入りたい、と言うのであった。しかも、彼女は「彼の心を強く引き付け」、その上で「はねつけ」た「白人社会」の一構成員、白人女性なのであった。彼女は、言わば白人女性として黒人である彼の恥辱と惨めさに、身体的に接触し、精神的に接近したのだ。彼の憎悪が納得できる。

メアリーの行為は「親切心」によるもので、それを憎むべきではない、彼女はビッグーを「一人の人間として受け入れていたのだ。」<sup>24)</sup>とマックスがたしなめると、ビッグーは白人女性の接近がもたらす生命の危険について語る。

『「マックスさん、私達黒人と白人はすっかり分離されているのです。あなたが親切だと言われることは全然親切ではないのです。私はあの女の人については何も知らなかったのです。私が知っていたのはあの人のような女性達のことで、彼等白人が私達黒人を殺すということだけでした。私達黒人と白人は離れて暮らしているのです。あの人はわざわざやって来てあのような振舞いをする。』<sup>25)</sup>

この最後の部分でビッグーが言う「あのような振舞い」とは、ジャンを紹介され、三人が黒人街のレストラン、アーニーズ・キチン・ジャックへ着くまでの間での振舞いであって、このレストランを出た後の行為ではないことに留意しておく必要がある。

白人女性に親切にされ、親しくされると白人の男達の制裁を受け、生命を失う恐れがあるので、彼女達が近づいて来ると憎悪と恐怖を感じる、と言うのだが、ビッグーが実際にメアリーとの身体的接触によって「白人男の目」を感じ、恐怖したのは、ドルトン邸宅の戸外で、ただ一度だけである。

しかし、この時の身体的接触に関しては、その仕方に注意を払う必要がある。ビッガーはメアリーののように、黒人に近づいて来る白人女性達の危険性を訴えているが、積極的に近づいているのはビッガーであってメアリーの方ではない。

彼女が車の中でバランスを崩して車の外にいる彼に助けを求めて手をのびた時、つまり、彼に接触を求めた時、彼はこれに応じることに何も危険性を意識していないし、彼女が憎らしいなど思ってもいない。彼は彼女を助け起こして、その体の柔らかさや髪の香にうっとりし、魅力を感じはしたが憎悪や恐怖など微塵も感じていない。

では、ビッガーは何故マックス弁護士に、メアリー憎悪の理由の一つとして、彼の生命の危機を挙げたのだろうか。

それは、彼がこの生命の危機をメアリー殺害の動機にしておきたかったからだろう。次の、彼とマックスの問答に注目したい。

『あの白人の女性を殺せば死刑になることが分からなかったのかね?』

『ええ、分かっていました。でもあの女に殺されそうな気がしたので、どうにでもなれ、と思ったのです。』<sup>26)</sup>

ビッガーの回答は、納得できそうに思えるが難点がある。意識朦朧となった状態でベッドに仰向けになっている者によって「殺される」わけがない。

しかし、白人女性の寝室に入り込んでいたので、そのような行為の現場を押しえられると、人種偏見の強い白人達によって殺される、というこれまでの確信が、衝動的に彼の意識を占めた、と考えれば、彼の回答は彼が言うところの白人女性の接近がもたらす危険性の枠に納め得る。

しかし、この解釈を生かすには、出来事の推移とその時間的経過を作為的に取捨選択して、メアリーが彼に近づいたという事実の一面だけを意図的に考慮の対象とし、ビッガーが彼女に近づいていったという一方の事実を取え

て無視しなければならないという不合理が生じる。

ビッグーの供述が不合理であるのは、彼が一つの簡単明瞭な事実を隠しているからである。それは彼が積極的にメアリーに接近し、接触したという事実である。

マックスにメアリーが好きだったのか、と問われてビッグーは逆上し、取り乱して、激しく否定したが、それはその問いが、彼がひた隠しにしていた、知られたくない、心の事実をとらえかけたからである、と言える。

マックスはそれ以上追及することもなく、ビッグーが言うところのメアリーに対する憎しみについて、理解すべく話を進めている。

彼はビッグーが彼に回答したところのメアリーに対する憎悪と恐怖と殺害の動機をそのまま真実として受け入れ、法廷で次のように事実経過を述べる。

『あの夜、たまたま一人の白人の娘がベッドにおり、一人の黒人の青年が恐怖のとりこになり、その女の子に憎しみを抱いて、そのそばに立っていました。そこへ目の見えない女性が入って来たので、我々が死刑に相当すると判断するに違いない状況に自分がいるところを発見されまいとして、彼はその娘を殺したのです。』<sup>27)</sup> (下線筆者)

マックスはここでビッグーが「殺される」と表現したところを、法的手段による死刑と読み替えているが、ミシシッピー育ちのビッグーが南部流に言ったことを北部流に表現したものと理解することができるので問題はない。

ここで検討課題として指摘しておきたいのは、作者リチャード・ライトがビッグーの事実隠蔽をマックスに継承させている点である。

さて、ビッグーの、メアリーが憎くなるもう一つの理由があるが、それはc)の状態として取り上げた。彼女も、要するに、黒人を差別し抑圧する白人

という他人種に帰属しているから憎いのであって、個人的、人間的に憎いのではない。但し、彼女の種族的側面に勝るだけの個人的、あるいは人間的な共通の体験があれば生じない性質のものであろう。

アーニーズ・キチン・ジャックを出てからビッガーのメアリーに対する対応に変化が見られるようになった点を二人でドライブ中に指摘されて、彼女を憎らしく思うところがある。

「彼女は寄りかかって来て彼の肩に頭をもたせかけた。

『かまわないでしょ?』

『かまいませんよ。』

『ねえ、あなたが、はい、とか、いいえ、とか単調な返事をしなくなつてから、もう3時間ばかりになるわ。』

彼女は腹を抱えて笑った。彼は憎悪で体がこわばった。またこの女は俺の心を見てとっているのだと彼は嫌な気がした。』<sup>28)</sup>

この憎悪は種族的なものではない。相手の女性に緊張ぶりを観察されていたと思えば憎らしい気持ちになっても不自然ではない。憎悪云々よりも二人の仲睦まじさに注目すべきだ。二人は数時間の内に、打ち解け合っているのだ。

ビッガーがメアリーに憎悪と恐怖しか持たなかったというのは嘘である。好きではなかった、というのも本当ではなさそうだ。

ではビッガーは何を憎悪し、何を恐怖したのか。また何が好きではないのかが問題になる。

ビッガーがドルトン氏の面接をすませたところへメアリーが現われて、初対面の彼に労働組合に入っているかどうか尋ねる。彼はこの時、この彼女を憎むが、それは彼女が場所を弁えずに質問するからであって、黒人の困窮に触れたわけでも、彼女が白人女性だからでもない。

採用されたその日、車で彼女を大学へ送る途中、彼は彼女に対して次のような感慨を抱く。

「これは全く変わった女の人だ。彼はこの女の人に、彼女が彼の心に感じさせる恐れを越えた何かを、恐れのとげない何かを感じるのだった。彼女は彼も人間であるかのように、彼も彼女と同じ世界に住んでいるかのように、彼に対応してくれた。他の白人に彼はこんな感じを受けたことは一度もなかった。」<sup>29)</sup>

彼は彼女の運転手になったばかりで、付き合いの体験が乏しい。だから、これも何かの策略ではないかと、彼女に感じた解放感に警戒心が入り混じる。

しかし、知り合って間もない彼女に、人種関係と社会関係を越えた人間関係を感じた意味は大きい。

彼はその日の午前中、友人のガスに、彼等黒人を差別し、分け隔てる白人への凄まじい憎悪を語り、その腹に据えかねる白人が彼の腹の中に住んでいて、その憎悪が何かの機会に暴発し、恐ろしいことが起こりそうだ、と言っていた。

そのビッガーがその日の夕方には、恐れを越えて得た何かを、恐れのとげない何かを、人種を越えた人間的なものをメアリーに感じたのである。

ビッガーがマックス弁護士に、メアリーが話しかけてきた時から、いや出会う前から彼女を憎んでいた、と述べた、その憎悪と恐怖の理由を語ったが、ビッガーとメアリーとの相互関係あるいは彼の彼女に対する一方的関係と照合してみると、それは事実を無視したり、歪曲したり、中には事実に反するものもあって、これは信憑性に著しく欠けることをここで指摘しておく。



さて、ピッガーがメアリーの部屋を探し当てたところへ戻ろう。

彼は部屋のドアを押し開け、片方の腕で彼女を抱え、一方の手で電灯のスイッチを探るが見つからない。暗がりに目を凝らしてベッドを見つけ、彼女を抱き上げて部屋に入りドアを閉ざす。

台所の戸口から中に入って、「白人の目」から遮断されると、彼が使用人に徹してその任務を遂行しつつ、一人間としてメアリーの体に行為し反応していたことは既に指摘した。

彼の使用人としての任務は彼女の部屋を探し当て、彼女のベッドを見つけて終わらんとしていた。

彼は抱え上げたメアリーをそのベッドに置き、そのまま静かに去ることによって、それは無事に終了し得た。

ところがピッガーは彼自身の自由意志で、彼の背後のドアを静かに閉ざし、白人女性の寝室にとどまった。彼はベッドのそばを離れようとはせず、目覚めそうもない彼女を目覚めさせようとする。この行為は余分であって、彼の役目の域を越えている。彼の役割が客観的な状況のもとに終わると、彼がそれまで平行して行なってきたメアリーに対する一方的な人間的反応が全面的に始動する。

「彼はまた彼女を抱きかかえ、暗がりの中で耳を澄ませていた。彼女の髪と肌の香に彼の感覚がくるめくようだった。彼女は自分の女の子、ベッシーよりもずっと小柄であったが、ずっと柔らかかった。」<sup>30)</sup>

彼は耳を澄ませて外部に人の気配がないことを確かめ、身の安全を計っているから、自分の行為が、その部屋に居ることを含めて、正しくないことを知っている。メアリーの体に興奮しているが、状況は掌握している。

白人女性の体を抱きかかえ、黒人女性の肉体と比べているのに、どうしてここで人種意識が生じてこないのだろうか。ベッシーよりも柔らかいメア

リーの女体にただ魅力を感じているだけである。そのわけは、ビッグー自身が一人間としてメアリーに一方向的に反応し行為しているだけではなく、彼は彼が黒人であることを忘れていたからだ。

メアリーは意識朦朧として彼には反応しないが、彼はそれを期待し求めて行為し、彼女の動きを彼の望み通りに受けとめて、これに積極的に反応し行為している。やがて、

「彼は彼女を抱き上げ、ベッドの上に寝かせた。今直ぐその場を離れななきゃ、と急ぎ立てるものがあった。しかし、彼は彼女の上に身をかかめ、彼女の乳房から両手を放したくなく、興奮したまま、暗がりに浮かぶ彼女の顔に見入っていた。」<sup>31)</sup>

彼は彼女の胸に置いた手に力を込めたり、キスしたりして、夢中になっている。彼はメアリーの魅力のとりこになっている。彼がマックス弁護士に供述し、法廷で陳述された、メアリーに対する憎悪と恐怖をどこに見よと言うのだろう。

彼がメアリーの体に夢中になっている時、寝室のドアがきしみ、振り返ると戸口にドルトン夫人が立っている。

メアリーの寝室でビッグーが恐怖したのはこのドルトン夫人に対してであって、メアリーにはではない。

またこの夫人に覚えた恐怖も、彼が酔って動けぬメアリーを寝室に運んで、ベッドに横たえた段階であれば、狼狽するほど激しいものではなかった筈だ。彼が使用人としての行き過ぎを咎められる恐れはあっても。

彼は単に白人女性のベッドのそばに居ただけではないことを彼自身も知っているのだ。だから、そこにいることをドルトン夫人に見つけられたくなかったのだ。

彼女は目が見えない。そこでビッグーはドルトン夫人の呼び掛けに応じよ

うとしかけるメアリーの口に枕の端を押し込んで、それを阻止しようと試み、ますます接近してくる夫人におびえて、枕でメアリーの顔を力一杯押さえつけ、結局彼女を死亡させてしまう。

彼は確かにおびえてはいたが、口に枕の端を詰め込み、さらに顔面をその枕で押さえ、体重をかければどうなるか、分別がつかぬ程おびえていたかは疑問である。これは検討を要する。

彼女は死亡し、ビッガーは白人女性殺しの現実を目覚めることになる。

(つづく)

[注]

\*引用箇所は全て Richard Wright, *Native Son* (Perennial Classic, 1966) による。

- 1) p. 80.
- 2) 3) p. 75.
- 4) 5) 6) 7) p. 81.
- 8) p. 83.
- 9) p. 323.
- 10) 11) p. 82.
- 12) p. 68.
- 13) p. 69.
- 14) p. 80.
- 15) p. 81.
- 16) p. 83.
- 17) p. 326.
- 18) 19) p. 324.
- 20) p. 14.
- 21) pp. 67, 68.
- 22) 23) p. 70.
- 24) 25) p. 324.
- 26) p. 330.
- 27) p. 367.
- 28) p. 80.
- 29) p. 66.

30) p. 83.

31) p. 84.